



○「英雄ネルソン」 船から船への送る信号旗で「DUTY」と読む ⇒

これまで校長講話は何回聴いたことでしょうか。私は、教員になってからも含めるとおそらく300回以上だと思います。一番印象に残っているのが「ホレーショ・ネルソン」に関する講話です。

彼は、トラファルガーの海戦で勝利した、ナポレオンからイギリス

を守った海軍提督です。彼が、信号旗を使ってイギリス艦隊の水兵に送った言葉が、「英国は**各員がその義務を尽くすことを期待する**」(England expects that every man will do his duty)で、イギリスの故ダイアナ元王妃の地雷撤去運動にも影響を与えたとされる「ノブレス・オブリージュ」の考えにもつながっているとされます。日本海海戦でロシアのバルチック艦隊を破った東郷平八郎もこの言葉に影響を受けたとされ、「**各員一層奮励努力せよ**」と信号旗(Z旗)で激励しました。

「高校生として努力せよ」という講話がされたわけではありません。校長先生は世界史の先生で、彼の生い立ちから、功績、歴史的背景などを長々と話されました。「この講話から校長先生が言いたいメッセージはなんだろう」と、長い講話の中で自分なりに思考を繰り返しました。おそらく20分近くたった最後に言われた言葉が、「言いたいのは、受験生は寝ると損(ネルソン)だということです。」でした。メッセージとネルソンの功績等とはほぼ関係ありませんでした。

なぜこの講話が印象に残ったのか。落胆と疲れが一気にやってきたからだと言えそうですが、一番は長時間講話が続く中で、自分なりにこの講話に込められたメッセージを思考し、話の中から探ろうとしていたからだと思います。また、思考の方向性と最後の言葉とに大きな差があったからだと思います。話は違いますが、高校の時数学が苦手でした。そんな中高校2年の時に教えてもらった先生の授業がとてもわかりやすく、定期試験でも高得点がとれました。しかし、模擬試験での成績は一向に伸びませんでした。

学習には、「知る」→「わかる」→「深める」の過程があると思っています。先生の授業はわかりやすいというのは一見良さそうですが、「知る」から「わかる」過程で思考が深まっていないと、つまり教師がわかるまでを丁寧に導きすぎると学力向上にはつながりにくいと思っています。また、「知る」から「わかる」過程を公式化して自分の中で「わかる」状態にした場合、公式にあてはめることで思考を最小限にとどめているため、わかった時の感動も少なく、そこから新たな疑問や問いも沸いてきません。「知る」から「わかる」過程で、どれだけジレンマ(葛藤)を味わい、思考をしたかが大事です。そうでないと学びが暗記的になってしまいます。「わかる」から「深める」過程、探究にジャンプするには、「わかる」過程での思考の量と質が大事です。

探究や、思考・判断・表現というような言葉が、今の教育のキーワードになっています。学びには感性が大事だと考えています。感性は、探究や思考を繰り返すことで磨かれていきます。「なぜだろう」という疑問から、調べたり、深めたり、考えたりしていくことで学力が身につけていきます。あたりまえのことをあたりまえと思わず、感性をさらに磨き、主体性を養ってください。

「あたりまえ」の反対は、「有り難い」です。あたりまえでないことに気づけば、感謝の気持ちにつながります。人生や学びを豊かにしていくには、いかに「あたりまえ」のことが、「あたりまえでない」ことに気づけるかだと思います。2学期が有意義なものになることを期待しています。

*「ノブレス・オブリージュ」とは、財産、権力、社会的地位の保持には義務が伴うという考え。

